

*Raffiné Journal vol.12*

なぜ今それをやるのか

理由のない行為は、  
軽やかに見えて、どこにも残らない。

それは自由ではなく、  
時間から切り離された状態だ。

いま、という言葉は、  
本来もっと重い。

ある俳優が、ひとつの作品について  
「なぜ今これをやる必要があるのか」  
と違和感を持ったと言っていた。

その違和感は、  
脚本が変わる中で消えたのではなく、  
作品が時間の中に置かれたとき、  
静かにほどけていった。

何をやるかではなく、  
それがどの時間の上にあるのか。

その位置が定まったとき、  
はじめてその行為は、存在する理由を持つ。

流行のスピードが上がるほど、  
理由は後回しにされる。

とりあえず出す。  
とりあえずやる。  
とりあえず乗る。

そうやって生まれたものは、  
同じ速さで消えていく。

そこに残るのは、  
行為の記録だけで、  
時間との接続はほとんど残らない。

「いま」という時間は、  
単独では存在していない。

過去の延長として現れ、  
未来へと伸びていく途中の一点でしかない。

だから本来、  
何かを“いまやる”ということは、  
その前後の時間を引き受けることでもある。

その連続の中に置かれないものは、  
ただ浮いた断片になる。

理由を持つことは、  
制限されることではない。

むしろ、  
どこにも接続されていない行為のほうが、  
輪郭を持たない。

なぜそれをやるのか。  
なぜそれが今なのか。

その問いを持った瞬間、  
行為ははじめて、  
時間の中に位置を持つ。

理由のない表現は、  
自由に見えて、実際には反応に近い。

環境に対して生まれたものは、  
環境が変われば消える。

一方で、理由を持った行為は、  
時間の中に置かれる。

過去と接続し、  
未来へと伸びていく線の上に現れる。

それは目立つとは限らないが、  
簡単には消えない。

そして、  
その問いを持つ人は、  
行為ではなく、時間の中で立っている。

「なぜ今か」を持たないものは、  
位置を持たない。

R.

Raffiné Journal vol.12  
2026

美学思想家  
古川玲奈

発行：Raffiné